

2023年度 第1回子ども学コロキウム@東北

子どもの発達から考えるナマハゲ(秋田大学)

来年度の子ども学会を青森県八戸で開催するに先立って、学会員の少ない東北地域に日本子ども学会の認知度を少しでも高めてもらおうと思ったとき、真っ先に思いついたテーマが「子どもと祭り」で連続コロキウムを実施することだった。東北にはねぶた、竿灯、七夕、三社大祭など、全国的に有名な祭りが多く、その中での子どもの活躍も印象的である。なにより八戸には「えんぶり」がある。

併せて頭に浮かんだのは、男鹿のナマハゲだ。ナマハゲはいわゆる「祭り」ではないが、巨大な鬼の形相が座敷に上がりこんで「泣く子はいねが〜、親の言うこと聞かぬ子はいねが〜」と探し回られ、隠れていても引きずり出されて号泣する子どもたちの姿には、祭りのもつ非日常性をもたらす感情の高ぶりと同質のものがある。一方で今日的に真っ先に「虐待」と糾弾されても不思議ではないあの有名な行事が、なぜ男鹿のあの地域に伝統として伝わり、国の重要無形民俗文化財やユネスコの世界無形文化遺産と位置づけられるほどの価値が見出すことができるのか。そもそもあの経験は子どもにとって、そして男鹿の地域社会にとって、どんな意味をもたらしているのか。これは子ども学として取り上げる意義があると思った。

今回のコロキウムを通して、これらの問いに少し近づくことができたと思う。というより、ナマハゲについては何も知らなかったことを思い知らされたといってよい。「ウォー」と叫びながら激しく扉をたたくその轟音の体感とともに、いつもの見慣れた座敷が一気に「劇場」と化し、その中に子どもが家族とともに巻き込まれるのである。あれは子どもを恐怖に陥れ、号泣の中で有無を言わず良心を喚起させ、従順と勤勉を誓わせることが本義ではなく、むしろ家族が総出で子どもを大事にしていること、自分は両親に守られ愛されていることを自覚させ、そして年の変わり目を寿ぐ神の営みなのだ。エリクソンの発達段階説でいえば、人生最初の葛藤である「基本的信頼 対 不信」、すなわち存在の不信を克服して世界に対する真の信頼を幼子に実感させる、地域ぐるみの、本気の通過儀礼なのだ。実際、あれを虐待だと非難するのはすべて地域外の人々であり、当の男鹿の子どもたちは、その翌日には早速ナマハゲごっこに興じるという。

このことを理解するために、われわれは男鹿市観光文化スポーツ部文化スポーツ課（文化財担当）の五十嵐祐介さん、太田圭さんという最適の「語り部」を得た。五十嵐さんは考古学者としても活躍する研究者でもあり、太田さんは男鹿生まれ男鹿育ちのナマハゲネイティブだ。メディアで紹介されるナマハゲがいかにデフォルメされたものか、それを秋田県の観光素材として上手に利用しながら、地域では集落ごとに異なる驚くほどの多様性をもって、それぞれの伝統をいまも守り続けているかを知ることができた。

主に地元秋田県を中心に 20 人余り集まってくださった会場からも、自分の思い出のふりかえりや新たな発見に、子どもの成長と地域社会のきずなについて、大切な何かをイン

スパイアされた様子がうかがえた。

会場との質疑応答を含めた今回のコロキウムの様子は、学会ホームページでもはじめと試みである動画アーカイブとして会員が視聴できるよう、現在準備中である。

実際、祭りに関する民俗学的研究は枚挙にいとまがないが、子どもに視点を当てた体系的な研究はほとんどない。これは子ども学の盲点であり、新分野の発見であるといえよう。次の2月18日に八戸で開催予定の「八戸えんぶりから考える子どもと祭り」にもご期待をこよう。

